



ブラジル特報



特集 リオデジャネイロの今昔

リオ450年の重み
リオを理解するための「10の採点基準」
五輪まであと1年準備は大丈夫？

あの町この町
ペトロリーナ



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

旅客鉄道事業に参画、400万人の市民の足を担う。
オデブレヒト・トランスポート社と共に、都市交通インフラを整え、都市の発展に貢献。

[Business innovation-2]

水力発電事業により、CO₂排出の少ないエネルギー開発を推進。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

[Business innovation-3]

ITを活用した教育事業で、次世代の人材育成に貢献。
オンライン教育事業のギーキー社に出資参画。一人ひとりの効果的な学びをサポート。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

..... 目次

(あの町この町) ペトロリーナ [唐木真吾] 3

(ブラジル・ナウ)
ブラジルからみた米・キューバ国交正常化 5
[子安昭子]

【特集】リオデジャネイロの今昔
リオ 450年の重み 6

リオを理解するための「10の採点基準」 [細島孝宏] 6

【特集】リオデジャネイロの今昔
五輪まであと1年、準備は大丈夫? [澤田吉啓] 8

日伯交流・親善さらに深める
大前会長二期目の決意 [大前孝雄] 9

ブラジルの文化とライフスタイルを称える 10
[アンドレ・コヘア・ド・ラゴ]

連載・ブラジル現地報告
ヴラディミール・カルヴァーリョ 監督 12
[布施直佐]

(日系企業シリーズ・第36回)
ヴァーレと日本企業の60年の協力 13
[マルコス・トゥリーニ]

(ビジネス法務の肝)
ブラジル腐敗防止法、14年初めから法人も対象に 14
[渡邊泰秀/笠原康弘]

連載★税務の勘どころ②
進出企業のビジネス障壁と税務の対応策 15
[エドアルド・ヴィトル/フェルナンド・マグリ]

(連載エッセイ)
ブラジルのメセナについての一考察 [花田勝暁] 16

(ウーマン・アイ) もてるものの悩み 17
[片岡万枝]

(ジャーナリストの旅路) 釧路の心とブラジル [野間清尚] 17

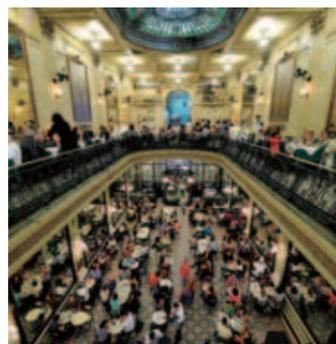
(連載文化評論)
グローボ TV 開局 50周年とブラジル現代史 18
[岸和田仁]

最近のブラジル政治経済事情 19

新刊書&新盤紹介 20

(びっくり豆知識)
ブラジルの国境線は10カ国 20

協会からのお知らせ 21



写真家田中克佳の「表紙のひとこと」
リオデジャネイロの「カフェ・コロソポ」。1894年にオープン以来、貴族や文化人たちが多く集まってきた。(65年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93年に退社後渡米し、独立。ニューヨーク在住。www.katsutanaka.com)

あの町、
この町

ペトロリーナ



ペトロリーナに初めて降り立った時、西部劇の舞台に来たような気分になった。カラカラに乾いた大地にサボテンが疎らに生えており、埃が多く日差しは強烈だった。ペトロリーナは半乾燥地帯に属しており、年間降雨量は400mm程度しかない。しばしば発生する早魃は、降雨量の少ないこの地の農家を幾度となく苦しめてきた。自然環境が非常に厳しく、1840年頃には住む人もいなかったペトロリーナではあるが、政府主導による灌漑事業により現在ではブラジルから輸出されるマンゴー、ブドウの9割を生産する一大農業フロンティアへと「奇跡的」な変貌を遂げた。

ペトロリーナとジュアゼイロの間を流れるサンフランシスコ河は、ミナスジェライスを水源とするブラジルの重要な大河の一つである。このサンフランシスコ河中流域は、1950年頃から米国をモデルとして灌漑農業の開発計画が進められてきた。1978年にソブラジーニョ人造湖(ダム)が竣工してからは、開発が本格化した。市街から40kmほど西にあるこのダムは総面積4,214km²、最大341億m³の貯水量を有する巨大人造湖であり、灌漑用水を供給する重要な役割を担っている。新しく拓かれた耕地は地元住民へ分譲された他、南伯からの移住者等にも分譲された。中でも、コチア組合等を通して移住してきた日系人の果たした功績は絶大である。(土壌塩性化の予防策、ぶどうの強制剪定による収穫時期の調整と生産性の向上など。) 農業開発をベースに発展してきたペトロリーナであるが、2002年には総合大学(連邦大学)が設置されるなど総合的社会的な開発も進められており、域外から多くの人を集めている。ペトロリーナとジュアゼイロを合わせた人口は、1980年に20万人であったのが現在は51万人まで成長している。30年前には信号機すらなかったというが、今では渋滞も発生するようになった。最近では、市内に洒落た喫茶店や大型の本屋がオープンし始め、ペトロリーナ市民も都会らしい生活を楽しむ時代になってきている。



唐木真吾 (ペトロリーナ在住3年)

グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなお提案も行っていきます。



プロフェッショナル、エグゼクティブのための転職支援サービス

20代、30代のための転職支援サービス



日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア9カ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュロンコン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。



日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ 株式会社日経HR TEL:03-6812-7307
e-mail: webeigy@nikkeihr.co.jp https://www.nikkeihr.co.jp



ブラジルからみた米・キューバ国交正常化

2014年12月17日、米国とキューバが1961年以降閉ざしていた国交正常化に向けた交渉を開始するというニュースが発表された。東西冷戦のさなか、キューバでは1959年にバティスタ独裁政権は打倒され、フィデル・カストロを中心とする革命政権が誕生した。カストロ政権はソ連との関係を深め、米国はそうしたキューバを社会主義国家として敵視し、キューバの民主化を促すべく、政治的・経済的に孤立させる諸政策を50年以上にわたって取り続けたのである。この間同じ緊張感をもって両国が激しく対立したわけではない。2006年以降(正式には2008年以降)キューバは弟のラウル・カストロが国家評議会議長の地位に就き、対米関係においてより現実主義的なスタンスをとった。米国もまた2009年にスタートしたオバマ政権が、ブッシュ前政権の強硬姿勢とは異なり、外交を通してキューバ問題を解決しようとする立場を示した。今回の米キューバ関係の変化は突然起こったものではなく、むしろ徐々に準備を整えた結果といえよう。

マリエル港改修工事はブラジルが大きな役割

ルセフ大統領がこのニュースを聞いたのは、公式発表前、メルコスル首脳会議(於アルゼンチン)の最中であったという。ルーラ政権時代からしばしばブラジル外交は仲介的な役割を担うことが多かったが、今回はとくにそうしたことはなかったようである。この点については、米国がブラジルを米州ボリバル人民同盟(ALBA)諸国寄りであり、仲介役には適当ではないと判断したとか、カストロ議長自身が他国の仲裁を拒否したなど、分析は様々である。ではブラジルが全く今回の動きと関係がなかったかといえば、そうではない。ブラジルにとってはオバマ政権がキューバとの関係修復を試みる以前から、(特に経済関係において)キューバとの関係を深めていたからである。

とりわけキューバのマリエル港改修工事において、ブラジルの果たした役割は大きい。首都ハバナから45キロに位置するマリエル港の改修工事費用9億5700万ドルのうち8億ドルをブラジル国立経済社会開発銀行(BNDES)が融資、大手オデブレヒト社が建設を行った。2014年1月の落成式(一部の完成について)にはルセフ大統領も出席し、追加融資を約束した。キューバにとってはマリエル

港の中に経済開発特区を作り外資を誘致する計画であり、ブラジルも対キューバ投資の更なる拡大が期待できる案件といわれている。(国内で「イデオロギー的な投資」の批判があることも確かだが)。ブラジルはキューバにとって中国、ベネズエラに次ぐ第三の貿易相手国であり、2003年から2013年の10年間で貿易額はおよそ7倍に拡大した(9200万ドルから6億2500万ドルへ)。ブラジルや中国などがキューバとの関係を強化する中で、米国の、とりわけ産業界が「このまま経済制裁を続けるだけでは、米国は一人取り残される」という危機感を感じていたことは明らかであった。その意味では、ブラジルは今回仲介役ではなかったにせよ、キューバとの経済関係の深化が、間接的に米国にキューバとの関係改善を促すきっかけになったとみることも可能であろう。

キューバが参加する地域統合が拡大。日本も支援を

2014年12月の「劇的な」発表以来、2015年4月にはパナマで第7回米州サミットが開かれ、ついにキューバのサミット参加が実現した。ラテンアメリカ諸国は今回のサミットへのキューバの参加を強く望んでいたという。その背景にはラテンアメリカ・カリブ共同体(CELAC)のようなキューバが参加する(その反対に米国が入らない)地域統合の動きが域内で進んでいることがある。「キューバはラテンアメリカの一員である」という考え方やその重要性は、われわれ日本人は表面的には理解できても、本当の意味では共有できていないかもしれない。これまで「キューバを除く…」という説明を幾度となく使ってきたが、いかにそれが異常であったか、そのことをもっとも重く受け止めてきたのはブラジルを含めラテンアメリカ諸国であろう。キューバが米国と国交を正常化し、様々な意味において一つの国家として米州でそして世界で立ち位置をつかむにはまだ解決すべき難問が残っている。われわれ日本も、キューバがこの50年余の間置かれてきた状況を理解し、ラテンアメリカ諸国とともにキューバの再建を支援していきたいと思う。(2015年5月29日、米国がキューバのテロ支援国家の指定を正式に解除したとの報道があった)。

子安昭子(上智大学教授)

★★★★★リオ450年の重み★★★★★

ブラジルを形作ったインキュベーター（孵化器）は古都サルバドル。先陣切って世界に躍り出たのはリオデジャネイロ、そして経済発展の牽引車はサンパウロ。3つの大都市は時代によって与えられた役割を果たしてきた。でもブラジルのシンボリック存在はどこかと聞かれたら、答えは「リオ」で文句はないだろう。悲喜劇、美醜、貧富、公私、今昔——両極端の歴史を重層的に背負ったこの街はブラジルの中で特別な存在として生き続けてきた。

ナチスの迫害から逃れ、最後はリオ郊外ペトロポリスで自死したオーストリア人作家シュテファン・ツバイクは百面相のようなリオの印象をこう書いた。「世界中でリオより美しい都市は他にないし、リオほど探求しにくい、わかりにくい都市もほとんどない」（『未来の国ブラジル』宮岡成次訳）。

そのリオが2015年3月、1565年の市創設から450周年を迎えた。新市庁舎や「リオ450」と名付けた地下トンネルも登場した。2016年にはリオ五輪・パラ

リンピックだ。リオ五輪は北半球では真夏の開催だが、現地のリオは真冬だ。今度の五輪は北半球の人たちに「発想の転換」を促す絶好の機会となる。

リオがサルバドルに代わって首都になったのは1762年。その後ポルトガル王室が本国からリオに移り住んだこともあって、市内には王室用の住居・庭園、劇場、学校、病院などの公共施設が整ったといわれる。

21世紀の今、リオとサンパウロの都市としての大きさ、経済規模は完全に入れ替わった。ブラジル全体のGDP（国内総生産）に占める割合を市レベルで見ると、サンパウロ市は12%、リオ市は5.4%、ブラジリア4.1%、クリチバ、ペロオリゾンテが各1.4%で、5都市で25%を占める（ブラジル地理統計院、2009年データ）。リオはサンパウロの半分以下の経済力でしかない。

人口だって700万人くらいだから1千万都市のサンパウロとは比較するまでもない。それでもなおリオがブラジルの代名詞のように言われるのはなぜか。きっと心の拠り所のような「リオの重み」があるからだろう。



リオを理解するための「10の採点基準」



2010年リオのカーニバルにて
細島孝宏

「リオの○○」といえば世界中誰もが真っ先に「カーニバル」と口にする。毎年数十万人もの市民が狂喜乱舞し自主的に伝統が受け継がれている世界最大の祭典には、10の採点基準がある。筆者は、打楽器部隊の一員としてリオのカーニバルに通算8回出場してきたが、カーニバルの優勝を目指して各サンバ・チームは4,000人前後の構成員を一致団結させ、10の採点基準で高得点を目指すために審査員の経歴や性格を踏まえて細かく分析する姿には毎回目を見張った。その採点基準にしたがってリオやカリオカ（リオっ子）の奥深さを探りつつ、独断で採点（各10点満点）してみたい。

1：MESTRE-SALA E PORTA BANDEIRA（旗手）

サンバ・チームの象徴である旗手には誇り高きプライドがある。カリオカはフランス文化への敬愛や長年首都とし

ての国際的知名度を誇りとし、他州（特にサンパウロ州）とは歴史的に一線を画す深く高いプライドがある。カリオカが話すポルトガル語は独特な発音であるが、ポルトガルからの移民が持ち込んだ発音がほぼそのまま保存されているとのこと。文句なし、10点。

2：COMISSAO DE FRENTE（先導隊）

ブラジル経済発展の先導するペトロプラス、ヴァーレ、国立経済社会開発銀行（BNDES）等はブラジリアへ遷都後もリオに本社を置き続けている。言うまでもなく経済の中心はサンパウロであるが、巨大公社・企業・政府系機関をリオに残したことは国家の戦略的選択であろうが、各職員の本音は「海もなく観光スポットも少ないブラジリアにいたら、特に外国からの顧客が来訪してくれなくなるから

…」。説得力にやや欠けるのでは…、8点。

3：FANTASIAS（衣装）

ブラジル人、特にカリオカにとっては衣食住の中では「衣」が最優先のようだ。高価というより自分らしさが主張できる衣服をきれいに着こなす技は見事である。他人へのマナーと言えば聞こえがよいが、見栄っ張りという方が的確かもしれない。40℃を越える真夏でも冷房が必要以上に効いたオフィスで背広とネクタイで執務するビジネスマンも多い（リオではクールビズという発想は出てこないであろう）。地球環境へのやさしさが欲しい、7点。

4：ALEGORIAS E ADERECOS（山車）

リオの象徴的「山車」といえばキリスト像であるが、リオ市内どこからでも見えるコルコバードの丘の上で両手を大きく広げている。リオ市民を暖かく見守り全てを受入れる姿であるが、最近では「絶えない犯罪や相次ぐ汚職問題にお手上げ！」と両手の位置が上向きになりつつあるようにも見えてくる。残念、9点。

5：CONJUNTO（バランス）

カリオカは絶妙なワーク・ライフバランス感覚がある。正確に言うと人生を楽しむために最低限のエネルギーで稼ぐことに関しては神業を備えている。ただし、人生も仕事も「最後は神頼みで何とかなるさ」という考えがあることも事実である。日本人が目指すワーク・ライフバランスとは少し異なるので9点。

6：ENREDO（歌詞）

ブラジルの中でもカリオカは会話・議論好きで有名である。話の内容はともかく、考える前にかく口を開く。ビジネスの世界では、ウイットの聞いた前振りには議論の成果に大きく影響するといっても過言ではない。また、会議のプレゼンテーションでは、内容はさておき、時に持ち時間も忘れてとにかく堂々と聞き手を説得する姿は圧巻である。準備周到でも本番に弱い日本人として見習いたい気持ちを込めて、10点。

7：EVOLUCAO（展開）

リオのインフラ、特に交通インフラ未整備による渋滞は旧態依然としており大きな展開がみられない。要因の一つは、リオの地形にある。固い岩盤が海岸近くに迫っており、道路の拡張や地下鉄工事は難儀である。港湾都市であるリオの交通網の改善策として、海上輸送の拡張を提案したい。車好きのカリオカにはフェリーを近郊都市からリオ中心部へ頻繁に往復させるのはどうだろう。将来への期待を込めて、8点。

8：HARMONIA（ハーモニー）

ブラジルのみならず世界的にみても、住宅街と貧民街が

リオデジャネイロ市政450年の歩み

| | |
|-------|--|
| 1500年 | カブラルが率いるポルトガル船団がブラジル到達。 |
| 1549年 | 初代ブラジル総督トメ・デ・ソウザがサルバドル総督府に赴任。 |
| 1565年 | リオデジャネイロ市創設 |
| 1762年 | リオが首都に。 |
| 1808年 | ポルトガル国王はナポレオンの侵入を逃れ、リオに避難。 |
| 1822年 | ポルトガル皇太子ドン・ペドロがリオに残り、帝政国家として独立。 |
| 1960年 | ブラジリアに遷都。それまではリオが政治の中心地だった。 |
| 2014年 | サッカーワールドカップ(W杯)開催。ブラジル代表はリオのマラカナンサッカー場の決勝戦には進出できず。 |
| 2015年 | リオ市政450周年 |
| 2016年 | リオ五輪開催 |

リオほど混在している都市は稀である。相次ぐ国際イベントに向けて麻薬組織掃討作戦が展開中であるが、真に平和化された貧民街がリオ都市化のハーモニーを奏でられる日はいつになるのであろうか。8点。

9：SAMBA ENREDO（メロディー）

ボサノバ発祥の地としても有名なリオ。今や日本のいたるところで耳にするボサノバのメロディーは安息効果が高く、日本では特にBGMとして使用されることが多い。リオの生活のゆとりから生まれた音楽が、時間に追われる日本で受け入れられたのだ。10点。

10：BATERIA（打楽器リズム）

最後に、カリオカの生活に欠かせないのがリズム感である。時に激しく情熱的に、特にゆったりとしたペースといった生活の緩急の付け方は絶妙なものがあふ。サンバ・チーム毎に独特のリズムがあるように、カリオカー一人一人に異なるリズムがあり、互いに認め合う。常にリズム感に満ちた楽観的な生き方は見習いたいので、10点。

ということで、採点結果は100点満点で89点。リオのカーニバルでは、特別グループ12チーム中の6位くらいの位置づけで、カーニバル終了後の土曜日に開催されるチャンピオン・パレードにぎりぎり参加できるかである。カリオカには日本人に欠けているものがあり、その逆もまた真なりである。カリオカと日本人を足して2で割れば理想的な人間となることは確かであり、筆者が常に目指すところでもある。

五輪まであと1年 準備は大丈夫？



澤田吉啓
(日本貿易振興機構=ジェトロ=横浜貿易
情報センター貿易・投資アドバイザー。
54年生まれ、リオ、サンパウロに長期駐在)

2016年のリオデジャネイロ五輪開幕まであと1年余りに迫ってきた。同年8月5日から21日まで開催されるリオ五輪では、42種のスポーツで161の男子競技、136の女子競技、9の男女混合競技が行われ、205か国から計10,500名の選手が参加する。

世界3大美港のひとつに数えられ、自然が作り上げたとは思えない見事な海岸と山で構成されるこのリゾート地には普段から世界からの観光客が途絶えることはない。しかしながら、リオは私が滞在した1980年代より前から今に至るまで変わらぬ弱点を抱えている。それは治安だ。背景に貧困問題があることは間違いないが、同時に点在する多くの貧民窟「ファベイラ」を舞台に暗躍する麻薬組織の存在が根深い問題を提起している。ほとんどのファベイラはこれら犯罪組織が支配し、警察権が及ばない無法地帯と化していた。

これが、ここ数年で大きな変化が起こっている。それはこの犯罪の温床であるファベイラでの警察権の確立に向けた犯罪掃討作戦である。長年リオ州政府も市もファベイラの制圧に軍を投入することには消極的であったが、世界が注目する2大イベントであるワールドカップと五輪を前に、なんとしても解決を図らなければならない問題として実行を決断し、次々とファベイラに装甲車を送り込み、犯罪組織の撲滅に取り組んできている。制圧後は再び犯罪組織が戻ることのないように、一定期間軍が駐留し、その後警察がそれを引き継いで駐在所を置いて警察権の確立を行ってきている。いまでは一部のファベイラで観光客を相手にした宿泊ツアーまであるらしい。

ただし、すべてのファベイラでそれが実現したわけではなく、追われた犯罪組織が別のファベイラや、他の州のファベイラに逃げ込む事態となっており、犯罪組織の完全な掃

討が実現したわけではまだないし、貧困と教育という根本的な問題を解決することなく本当の治安回復は容易ではないだろう。

リオ五輪を迎えるにあたって私が注目しているポイントはほかにもある。それはインフラである。ここでは空港と競技施設に限定して述べたい。私がリオに滞在していた1980年代後半から1990年代初頭は、リオデジャネイロは世界の空の玄関口の役割を果たしていた。すなわち、ほぼすべての国際便はまずはリオデジャネイロに入っていたのである。しかしながらこの役割はその後サンパウロに奪われてしまい、今日に至っている。

今回の五輪で、リオがその地位を奪い返すにはあまりにもサンパウロに水をあけられてしまっている現実がある。リオデジャネイロ国際空港（通称ガレオン）を利用する航空会社は国内外合計で24社であるのに対して、サンパウロ国際空港（通称グアルーリョス）は40社、ある日の国際到着便の出発地を数えてみるとリオは10都市からに対してサンパウロは34都市から到着している。空港利用者数もリオは月144万人（2014年の総旅客数の月割数）に対してサンパウロは380万人（2015年2月の実数）とその差は歴然としている。

ともあれ、五輪を控えガレオンも既存ターミナルや関連施設のお化粧直しのみならず、今後新たに47の駐機場の整備、26か所の新規搭乗ゲートの設置、68か所のチェックインカウンター新設、2,700台分の駐車スペース拡張（現状収容台数は4,284台）をめざして鋭意取り組んでいるところだ。観光地リオに直行で入る便が少しでも増えることは意味があろう。

ブラジルのインフラプロジェクトは予定通りに進まないのが当たり前と言ってよいほどだが、五輪の全4地区の計31の競技施設のうち、予定より建設が遅れていると関係者が認めているのは自転車競技の会場のみとされているがそれは本当だろうか。その一方で最後に帳尻を合わせるのがうまいのもブラジルという国であり、そこに治安が改善したリオデジャネイロが実現すれば、観光都市としての魅力はさらに高まることになるであろうが、果たしてどうだろうか。その成否が判明するのにもうそれほどの時間は残されていない。



リオ五輪開会式場と五輪記念硬貨

日伯交流・親善さらに深める 大前会長二期目の決意



大前孝雄
(日本ブラジル中央協会会長、三井物産特任顧問)

今からちょうど120年前、日本とブラジルは2国間修好通商航海条約を締結し正式に国交を樹立しました。この記念すべき節目の年に当たり、去る6月18日に開催された平成27年度日本ブラジル中央協会定時会員総会・理事会において会長に再任され、二期目を務めさせていただくこととなりました。この機会に改めて「日伯両国間の経済及び文化交流の促進と親善への貢献」という当協会の設立目的を思い起こすに、その責任の重さと同時に大きなやり甲斐を覚えます。

協会の財務基盤強化、会員数拡大を達成

振り返って2年前、故清水前会長の後を継ぎ会長を引き受けるに当たって申し述べた所信表明においては、

- 協会の財政的、人的体制強化と活動内容の充実を通じ往年の魅力と活力を取り戻す
- 会員数の増強を通じ協会の財務基盤の強化を進める(法人会員100社体制の達成)
- 協会の知名度向上を図るとともに、受益者たる会員の皆様への質・量両面でのサービス強化に努め、企業人のみならず広く一般の人々にも関心を持たれるよりオープンでアクセスが容易な協会へと変えていく

——を目標に掲げました。そして、会員の皆様の力強いご支援、ご協力を得て、この2年間でオフィスの移転、特報・ホームページの大幅な刷新等を通じた情報発信機能の強化、各種講演会・ポルトガル語講習の拡充を含む文化啓蒙活動の強化、志を同じくする多様な諸機関・団体との連携強化（イベントの共催・後援を含む）等、着実に具体的成果を上げることが出来ました。更に、具体的目標として掲げた法人会員100社体制を達成できたことも特筆すべき成果と役員一同自負するところです。また、こうした成果を踏まえ、当協会の一体感を更に強化するための新たな試みとして会員同士の親睦を深めることを目指した懇親会も開催、今後もこうしたイベントの開催を継続していく予定です。

ブラジルはなお戦略的同盟国

現在、足元のブラジル経済の低迷は深刻であり、その回復には数年単位の時間が必要とみられ、日本のブラジルへの視線は若干様子見の体を示していますが、ブラジルが発展途上の巨大な消費市場であると同時に、日本の資源・食糧安保上の重要な戦略的同盟国となり得る存在であることを決して忘れてはならず、ブラジルとの関係は短期的な視野だけではなく、中長期的な視点で捉えていかなければなりません。

そうした視点に立って日伯間の公的交流を眺めると、ブラジルでワールドカップが開催された昨年は、安倍総理が日本の総理として実に10年振りに訪伯、そして、外交関係樹立120周年に当たる今年はルセフ大統領の訪日、皇族の訪伯、日伯議員連盟の相互訪問の可能性が高く、更に、リオ五輪が開催される来年は、安倍総理、森元総理、舛添東京都知事、皇族の訪伯の可能性も期待される等、この3年間は両国関係にとって謂わば「飛躍の3年」とも位置付けられる重要なものとなります。

両国経済界の政策対話にも深く関与

このモメンタムを絶やさぬよう我々民間としてもこうした官の動きに呼応して両国関係の活性化に資する活動を展開していく必要があります。その一つとして、偶々、私は経団連日伯経済委員会の委員長会社、及び、日伯賢人会議メンバー企業に属する立場から、これら両国経済界の政策対話の枠組みにも深く関与しており、年次ベースで日伯相互に開催されるこれら2つの会合での議論を通じ、民がリードする形で鋭意両国経済関係の活性化を推進しています。

当協会と致しましても、こうした官民の動きに呼応し、確りこれらを補完する活動をより積極的に進めて参りたく、会員の皆様におかれても、引き続きこれまで以上の温かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

ブラジルの文化と ライフスタイルを称える

日伯国交120周年で、駐日ブラジル大使館などが 一大フェスティバル計画

アンドレ・コヘア・ド・ラゴ
(駐日ブラジル大使・日本ブラジル中央協会名誉会長)

本年2015年に、ブラジルと日本は外交関係樹立120周年の節目を迎え、政治、経済、通商、文化の各分野で二国間の行事が目白押しだ。

この重要な節目を祝うために、駐日ブラジル大使館はブラジルと日本の権威ある様々な文化施設と提携して「1st ブラジリアン・カルチャー・フェスティバル in Japan」を開催する。本フェスティバルは写真、建築、現代美術の展覧会で構成され、クリエイティブで現代的、コスモポリタンなブラジルの側面と、非常に独自の社会的、文化的、環境的な特徴を備えた国の側面——これらが形成する「ブラジリアン・ライフスタイル」を映し出す。

劈頭はオスカー・ニーマイヤー展

フェスティバルの劈頭を飾るのは「オスカー・ニーマイヤー展 ブラジルの世界遺産をつくった男」で、2015年7月18日から10月12日まで東京都現代美術館(MOT)にて開催する。本展は、ブラジルでもっとも偉大な建築家で1988年にプリツカー賞を受賞したオスカー・ニーマイヤーの本邦初の大規模な回顧展となる。

ニーマイヤーは日本国内に建築作品を残していないものの、今日世界有数とされる日本建築に多大な影響を及ぼしている。キュレーションはMOTのチーフキュレーター長谷川祐子、会場構成は2010年のプリツカー賞受賞者・妹島和世と西沢立衛(SANAA)が担当する。会期中、MOTにおいてニーマイヤーとブラジル現代建築の遺産に関する建築家と専門家の討論会を予定している。

女性建築家リナ・ボ展や日系人写真家大原展

2015年12月にはワタリウム美術館にて、もっとも卓越したブラジル人女性建築家リナ・ボ・バルディの本邦初の展覧会を開く。今年は同氏の生誕100周年の翌年に当たり、サンパウロのインスティチュート・リナ・ボ & P.M.バルディの協力の下、主要な建築作品を紹介する。会場構成は日本の著名な女性建築家・妹島和世(SANAA)が担当する。

やはり本邦初の企画として、日系人写真家・大原治雄(おおはら・はるお、1909-1999)の写真展を2016年上半年に高知県立美術館で開催する。大原はつねに身近な人々を、急がずに、多少の手間をかけて撮影し、手順をくまなく日記に記録している。没後、遺族はコレクション全体をインスティチュート・モレイラ・サーレス(IMS)に寄贈。2008年に、IMSは大原が撮影したモノクロ写真の巡回展を開始している。この作品群は、ブラジルに移住して小規模な農業を営み、今日ブラジル有数の表現力豊かな写真家と評価される大原治雄の作品と時代の深い研究を可能にしている。

カフェ・ド・ブラジルを再現

本フェスティバルではさらに、1934年に駐日ブラジル大使館とブラジルコーヒー局の企画として銀座に開設された「ブラジルコーヒー陳列所(CAFÉ DO BRASIL)」の一時的再現も企画している。この施設の当時の主目的は、ブラジル製品の販売促進だけでなく、ブラジルとモダンで洗練されたライフスタイルを結びつけることだった。東京であまり普及していなかったコーヒーを無料提供し、日本の一般大衆の消費促進を図った。CAFÉ DO BRASILは銀座の中心にある竣工したば

かりの建物にあった。建物を設計した建築家アントニン・レーモンドは、夫人のノエミとともにCAFÉ DO BRASIL専用の調度品の設計も手掛けた。CAFÉ DO BRASILのメインルームには、20世紀のおそらくもっとも有名な日本人洋画家・藤田レオナルドが描いたブラジルの風景の巨大な壁画が飾られていた。長年パリに在住した藤田は、1932年に数カ月間リオデジャネイロとサンパウロに滞在したことがある。

藤田嗣治の壁画も再構築

藤田の壁画の原画のパーツを東京に集めて再構築し、アントニン・レーモンド設計事務所が本展のために特別に再設計した調度品も揃えてCAFÉ DO BRASILのオリジナルの姿を再現する。本展は3カ月間一般に公開し、講演会やコンサート、写真展などの各種文化イベントを併催する。展示スペースは「ブラジリアン・ライフスタイル」のモダンなイメージを広める場であると同時に、美味しいブラジル・コーヒーを賞味できる場となる。

結論として、本フェスティバルは、日本の一般の方々にブラジルの芸術と文化、ライフスタイルを宣伝し、日本



銀座にあるカフェ・ド・ブラジルの藤田嗣治の壁画

におけるブラジルの理解を深めることを目指している。またこれを契機に、両国のオリンピックの開催(2016のリオ、2020の東京)にちなみ「From Rio to Tokyo」と銘打つ相互の絆を深めるムーブメントを始める。本フェスティバルは、文化、学術、経済、通商、投資セミナーといったその他の一連の取り組みの一環である。

本フェスティバルは駐日ブラジル大使館がヴァーレ社の特別協賛並びに三井物産とイタウ銀行の協賛、三菱商事の協力を得て実施する。日本に利害関係のあるブラジル企業とブラジルに投資している日本企業の参加は、ブラジルの現代文化の宣伝が深い関心を喚起することを示している。当大使館はまた、日伯友好を代表する日本ブラジル中央協会のような諸団体とのパートナーシップと、ブラジルとそのライフスタイルを高く評価する日本の市民社会の皆様に支えられていると確信する。

(ポルトガル語本文は協会ホームページでご覧になれます)

Exposição "Oscar Niemeyer - The Man Who Built Brasilia"
Data: de 18 de julho a 12 de outubro de 2015 (75 dias)
Local: Museu de Arte Contemporânea de Tóquio

「オスカー・ニーマイヤー展 ブラジルの世界遺産をつくった男」
●会期: 2015年7月18日~10月12日(75日間)
●会場: 東京都現代美術館

Festival Bossa Aoyama / Show de Ellen Oléria
Data: 24 e 25 de outubro de 2015 (a confirmar)
Local: nas proximidades da estação de Gaienmae

「ボッサ青山 エレン・オレリア参加予定」
●会期: 2015年10月24日-25日
●会場: 外苑前駅周辺の会場

Exposição de Lina Bo Bardi
Data: 4 de dezembro de 2015 a 25 de fevereiro de 2016
Local: Watari-um

「リナ・ボ・バルディ(Lina Bo Bardi) 建築作品展」
●会期: 2015年12月4日~2016年2月25日
●会場: ワタリウム美術館

"Café do Brasil" - reprodução do Café do Brasil do Departamento Nacional do Café do ano 1934-1940
Data: primeiro semestre de 2016
Local: Ginza

「カフェ・ド・ブラジル 2015年版(Café do Brasil)」
珈琲店一 藤田嗣治壁画展
●会期: 2016年上半年 ●会場: 銀座

Exposição de Regina Silveira
Data: primeiro semestre de 2016
Local: Embaixada do Brasil

「ヘジーナ・シウヴェイラ(Regina Silveira) 絵画とインスタレーション」
●会期: 2016年上半年
●会場: 駐日ブラジル大使館

Exposição de Fotografia de Haruo Ohara
Data: 09/abril-12/junho/2016
Local: Kochi Prefectural Art Museum
Data: outono de 2016
Local: Museu de Arte da cidade de Itami

「大原治雄(Haruo Ohara) 写真作品展」
●会期: 2016年
●会場: 高知県立美術館: 2016年4月9日~6月12日
伊丹市立美術館: 2016年秋

Exposição de Fotografia de Cristiano Mascaro
Data: primeiro semestre de 2016
Local: Embaixada do Brasil (Espaço Manabu Mabe)
「クリスチアーノ・マスカロ(Cristiano Mascaro) 写真作品展」
●会期: 2016年上半年
●会場: 駐日ブラジル大使館文化催事場

ニーマイヤーが設計したブラジリアの国会議事堂



ブラジルドキュメンタリー映画界の長老 ヴラディミール・カルヴァーリョ監督



布施直佐
(月刊ビンドラマ編集長)

今年の4月に開かれた第20回国際ドキュメンタリー映画祭(É Tudo Verdade)では今年生誕百年を迎えたオーソン・ウェルズと並んで、ブラジルを代表するドキュメンタリー監督のヴラディミール・カルヴァーリョ(1935~)の特集が組まれた。

ブラジル北東部のパライバ州に生まれ、22歳の時にロバート・フラハティの「アラン」を観て映画の道を志すようになったカルヴァーリョは、1959年、ブラジル現代ドキュメンタリーの嚆矢となる「アルアンダ(リンドゥアルテ・ノローニャ監督)」に脚本及び助監督として参加し、映画製作に足を踏み入れた。その後、短編ドキュメンタリーを1本、友人と共同で監督した後、1964年にエドゥアルド・コウチーニョの「死を宣告された男」に助監督として参加。撮影開始2ヶ月後に軍事革命が起こり、撮影隊は「キューバから来た革命分子」とのレッテルを貼られ、軍隊に包囲されるなど、修行時代にかなりの修羅場をくぐってきた。

今回の特集では、1966年から1971年にかけて故郷のパライバに何度も赴き完成させた、長編ドキュメンタリー第1作「聖サルエの国」をはじめ、ブラジル北東部をテーマにした長編4作が上映された。監督も上映に毎回立ち会い、観客たちとの質疑応答を熱心に楽しんだ。

処女作「聖サルエの国」というタイトルはカルヴァーリョが子供の頃に目にした、マノエル・カミーロ・ドス・サントス作のコルデル(民衆向けの詩)「聖サルエの国への旅」から採られた。この詩では、「聖サルエの国」という想像上の国が唄われ、そこでは牛乳・蜂蜜が川となって流れ、木には金がなっており、男も女も永遠に若く美しいままで、クスクス(トウモロコシの粒パスタ)で出来た山がある、とされている。「聖サルエの国」は北東部の農民たちの願望を形にしたユートピアで、現実の生活の苛酷さとの対照を成している。

この作品では牧畜や綿栽培に従事する農民たちが強いられる貧窮生活、そしてその原因となる旱魃・洪水、貧窮から抜け出せないように仕組まれた経済システムのからくりが、映像によって次から次へと観るものに向かって砲丸のように投げ出される。

また、この作品の音声は、以下の4種類で構成される。

- 1. 詩の朗読:** 監督によってセルタン(北東部の乾燥地帯)自身のモノローグと指定され、作品全体のトーンを支配している。
- 2. ナレーション:** 状況の客観的な説明。
- 3. 登場人物のインタビュー:** 録音機がなかったため、撮影時の録音は一切行わず、登場人物のインタビューをとる時は、市の中心部まで一緒に連れて行き、小さなラジオ局を借りて録音を行った。
- 4. 音楽:** 絶えずバックで鳴り響く地元の民族音楽と、映像と対比してアイロニカルな使われ方をされるポップス(若きロベルト・カルロスの曲もある!)。こうした音声の多重構成は後の作品の多くでも継承されることとなる。

この作品で描かれたブラジル北東部の住民の悲惨な状況は、当時、軍事政権が掲げていた「偉大なブラジル」というイメージと真っ向から対立するもので、検閲により上映禁止となる(シネクラブを中心とした上映許可を求める粘り強い運動の結果、上映許可がおりたのは1979年)。

今回の特集で上映されたのは他に、パライバ州出身のジョゼ・アメリカ・デ・アルメイダ(作家としては、若き時に執筆した「バガセイラ(砂糖黍粕)」はジョルジュ・アマードに強い影響を与え、「カカオ」を執筆させるもととなり、政治家としては1930年革命の立役者の一人)の伝記映画「アレイアの男(1982年)」、アラゴアス州出身の政治家テオトニオ・ヴィレラ(軍事政権下で民主化の動きを推進した立役者の一人)の伝記映画「テオトニオの福音書(1984年)」、それに、20年の歳月をかけて完成させた「郷土の年老いた戦士たち(1990年)」、だ。特に「郷土の年老いた戦士たち」はブラジル建設に携わった北東部出身の労働者たちが置かれた過酷な労働条件、劣悪な生活環境、警察による弾圧を驚嘆すべき粘り強さで描ききり、エドゥアルド・コウチーニョの「死を宣告された男」と並んでブラジルドキュメンタリー史に残る金字塔的作品となった。

80歳になった現在もその旺盛な制作欲は一向に衰えず、次回作となるペルナンブコ州出身の画家シセロ・ディアスの伝記映画も完成間近とのことだ。

ヴァーレと日本企業の60年の協力

マルコス・トゥリーニ
(ヴァーレ・アジア代表取締役社長)



鉄鉱石の対日輸出は12億トン超

ヴァーレが初めて日本の製鉄会社と鉄鉱石の取引契約を締結してから今年で60年を迎えた。日本との取引が始まった1955年、当社は数千トンの鉄鉱石を日本に向けて出荷したが、それから2014年までに出荷量は2720万トンに拡大した。現在日本は当社の3大輸出相手国の一つとなっている。2015年の1月から3月(第1四半期)にヴァーレが日本市場へ出荷した鉄鉱石およびペレットの量は計657万2000トン、過去60年の間に日本へ輸出した鉄鉱石の量は12億トンを上回っている。

ヴァーレと日本の協力関係は、ここ数十年にわたって行われてきた金属鉱物や石炭、輸送、鋼材、肥料、基金関連の合併事業や投資によって強化された。一例を挙げると、当社は三井物産とともにペルーのバイオバール地区におけるリン鉱石生産事業に参画している。またニューカレドニアではスミックと共同事業を推進し、インドネシアでは住友金属鉱山と連携してニッケル生産を行っている。

JBICとも重要な協力関係

当社は国際協力銀行(JBIC)とも重要な協力関係にある。2014年には同行と日本への鉱物資源供給や、日本企業による鉱山関連機器の輸出に資するプロジェクトの実現のための協議を通じた業務協力を骨子とした覚書を締結した。また2014年には、モザンビークのモアティーゼ炭鉱の



世界最大のカラジャス鉄鉱山(ヴァーレ提供)

権益95%を保有するヴァーレ・モザンビークの持分15%と、ナカラ回廊鉄道・港湾インフラ事業を推進するヴァーレ子会社の持分50%から70%を三井物産が取得することで合意し、関連契約を締結した。三井物産は当社との合意により、ブラジル国内で複合一貫輸送を推進するVLI社の株式20%も取得している。

カラジャス鉄鉱山やニブラスコも

ヴァーレと日本との協力関係によって両国間の貿易は拡大し、ブラジルには様々な恩恵もたらされた。1980年代初頭に始まった世界最大の露天掘り鉄鉱山であるカラジャス鉄鉱山の開発プロジェクトも、日本のパートナーの協力によって強化された。またヴァーレは、新日鐵、住友金属(現新日鐵住金)、JFEスチール、神戸製鋼、日新製鋼といった日本の大手鉄鋼会社の支援を受け、ペレット製造会社ニブラスコを設立したほか、ヴィトリア市のツパロン港建設事業でも日本企業と協力し、様々な商品の輸出入により現地経済の多様化に貢献した。

日本におけるヴァーレ

現在、ヴァーレは1984年に開設された日本事務所のほか、三重県松阪市のニッケル精錬工場を運営する子会社ヴァーレ・ジャパンの株式87%を保有している。年間生産能力6万トンの同工場は、今年で操業開始から50周年を迎えた。

ヴァーレと日本のパートナーや取引企業は、共通の長期的視点や方針、価値観を持ち、お互いを信頼、尊敬する関係を保ちながら、企業や人、様々な文化を結びつけることでビジネスおよび健全で実り多き関係のための基礎を築いていると確信する。この60年間の友情と協力関係に関し日本に対して心から感謝申し上げるとともに、さらなる成功と共同事業の実現に向けて今後も引き続き努力していきたい。

(英文の全文は当協会ホームページでご覧になれます)

ブラジル腐敗防止法、 14年初めから 法人も対象に



渡邊泰秀
(弁護士。長島・大野・常松法律事務所パートナー)



笠原康弘
(弁護士。同NYオフィス、サンパウロ研修を終え東京復帰)

ブラジルにも賄賂を規制する刑法があったが、ブラジル刑法は、個人の罪のみを規定しており、法人を対象とはしていなかった。国際的な腐敗防止の機運の高まりを受け、ブラジルは2013年8月1日に腐敗防止法(Clean Companies Act、以下「CCA」という)を制定し、2014年1月29日に施行された。CCAの概要を紹介するとともに、2015年3月18日に出されたCCAの施行令に相当する大統領令第8,420号の概要を紹介し、日本企業がブラジルで事業活動を行う上で注意すべき点をまとめた。

1. CCAの対象と罰金

CCAは、ある法主体が法人化されているかどうかにかかわらず、あらゆる法主体を対象としている(以下、自然人と区別する観点から自然人以外の法主体を便宜的に「会社」という)。また、外国の会社であっても、ブラジル国内にオフィス、支店等があれば、対象となりうるため、ブラジル国内で事業活動を行っている日本企業は、CCAの対象となる可能性が高い。CCAは行政上の責任及び民事上の責任を定めているが、厳格責任(Strict Liability)となっている。

CCAの条文(英訳)上は、単に「strictly liable」とされているのみであるためこれが具体的に何を意味するかは必ずしも明らかではないが、ある会社が、それが賄賂等に使用されることを知らずに第三者に資金を提供したような場合であっても(なお、第三者を介した行為についてもCCAによる制裁の対象となる)、会社の認識や、会社において取られた事前の手續(典型的にはコンプライアンスプログラム)にかかわらず、CCAに違反し、行政上又は民事上の責任を負う可能性がある。なお、CCA上刑事罰は定められていない(自然人については冒頭で述べたとおり刑法に基づく刑罰がある)。罰金額は、前会計年度の総売上高の0.1%から20%(但し、罰金の対象となった行為により受けた便益よりも大きい額とされている)とされ、総売上高が算定できない場合には、6,000レアルから6,000万レアルとされている。

2. M&Aとの関係

ブラジルの会社を買収する場合において、対象会社が過去にCCAに違反していたときは、買収者は、買収した資産額を上限として、対象会社の承継者としてCCA

上の責任(罰金額の支払い義務など)を負担しなければならない可能性がある。このため、ブラジル企業を買収する場合には、買収した資産の額を限度として、対象会社の従前のCCA違反について罰金等の支払い義務を承継する可能性があり、事前のデューデリジェンスで対象会社がCCAを遵守しているかどうかについて十分な確認が必要となる。また、罰金額の支払い等の負担については、親会社や関係会社も連帯して責任を負うとされているため、万が一、日本企業のブラジル子会社が罰金の支払いを求められた場合、その親会社も連帯して責任を負わなければならない点にも注意する必要がある。

3. 大統領令第8,420号の内容

大統領令第8,420号では、①罰金額の算定基準が明確化され、また、②罰金額の減免事由となりうるコンプライアンスプログラムの要求基準が明確化された。①については、例えば、継続的な違法行為があった場合や経営陣が違法な行為を容認していた場合には1%~2.5%加重され、また、再度の違法行為の場合には、5%加重されるとされている。他方で、例えば、当局による調査に協力した場合には1%~1.5%減額され、また、違法な行為を自主申告した場合にも2%減額されるとされている。

さらに、②のコンプライアンスプログラムの内容とも関係するが、会社がコンプライアンスプログラムを有しており、それが実効的なものと認められた場合には、1%~4%の減額がなされるとされた。②制裁の減免事由となりうるコンプライアンスプログラムの要求基準については、16項目にわたって詳細が定められており、例えば、経営陣の関与、継続的なトレーニング、適切な会計手続などが定められている。上記のとおり、適切なコンプライアンスプログラムがあったとしても、CCA上の責任がStrict Liabilityであることから、会社が罰金等の支払いをしなければならない可能性はあるが、少なくとも、できるだけ多くの減額を勝ち取ることができるようにするために、ブラジルで事業活動を行っている日本企業としては、大統領令第8,420号に従ったコンプライアンスプログラムを策定することが望ましい。

進出企業の ビジネス障壁と 税務の対応策



エドアルド・
ヴェイトール
(トムソン・ロイター
GTMサービスグローバル
ヘッド)



フェルナンド・
マグリ
(トムソン・ロイター
GTMサービスアライア
ンスマネージャー)

前回、ブラジルへの輸入に関連した間接税制度の複雑さと改善につながる制度を紹介した。その中で関連法、施策への継続的な理解がブラジルでの輸入を伴うビジネスでの成功にいかにか重要かという点を説明した。今回は、ブラジルでのビジネス展開に関する、税制を含めた主な障壁を確認し、最も有効な対応策である競争力強化の特別関税制度を前回に続いてより詳しく紹介する。

のしかかるビジネス障壁

障壁1. 複雑な租税制度

他国に比べて高い、製品と貿易取引に課せられる税金に加えて、給与に付加される社会負担金も求められる。米国や英国のような先進国で外国企業が課税を受ける主要な税は、2~3種類であるのに対し、ブラジルでは、8~10種類に達する。さらにこれら税の改変まで含めれば事態はより深刻となる。

障壁2. 情報処理のIT化に伴う業務負荷

IT化自体は、コミュニケーションと管理の改善をもたらすものである。しかし、電子税務出荷伝票システムを始めとする各種帳簿の電子処理システム(SPED)、移転価格事務処理並びに製品及びサービスの輸出入管理システム(SISCOMEX及びSISCOSERV)への、データのインプットとそれらデータの整合性の確保に責任を負う企業にとっては、作業量と管理業務の増加が大きな負担となる。

障壁3. 物流の近代化投資に伴う事業コスト

港湾と空港が拡張と近代化のための投資が必要とされているが、環境保護関連法による障壁と労働力の制約という問題に遭遇している。関係業界以外にとっては制約的要素となり、事業コストの上昇を回避するため計画・管理段階での厳重な注意が要求される。

障壁4. ブラジル・レアルの変動

特に対米ドルへのブラジル・レアル安の傾向が続いており、ブラジル国内で活動する外国企業にとって、輸入費用の増加につながり収益を圧迫している。他方では、レアル安はブラジル製品の国際競争力の向上に貢献している。

これら経済的及び政治的問題を抱えているが、政府の財政

支出、高金利、及び高インフレと低成長を相殺する原油価格下落に対する低い脆弱性により、2015年度も外国投資家を引き付ける新興市場の一つに入ると考えられている。貿易総額も、増減の変動を繰り返しながらも長期的には増加基調にあり、ブラジルの貿易総額は2005年の1,920億ドルから2014年には4,540億ドルへ増加している。

貿易取引での特別関税制度の採用が有効

引き続き投資価値の高いブラジル市場で、外国企業が効率的な活動を実現するには、どうすれば良いのか。特に貿易取引においては、タックスプランニング、輸出入手続きの戦略的議論及び間接税と輸入税の影響を軽減できる特別関税制度のような、税務面でのメリットをもたらす優遇措置の採用が最も有効である。以下、主な特別関税制度を紹介する。

① ZPE- 輸出振興特区=輸出(間接的及び直接的)向け現地生産。ZPEに設置された他の企業向け販売(輸出とみなされる)を優遇。② RECOF- コンピューター管理工業用倉庫特別関税制度=輸出用製品の製造に使用する物品を、減・免税で輸入又は国内市場で取得できる。③ Drawback- 関税払い戻し制度=ブラジルの輸出を促進することを主たる目的とした優遇制度。④ Entrepoto Aduaneiro Industrial- 工業用保税倉庫=製造会社の特定の施設が、海外市場向け製品の生産に使用される物品を、減・免税にて輸入できる。⑤ REPLAT- 原油天然ガス探査採掘プラットフォーム保税倉庫特別関税制度=海外に拠点を置く企業との契約に基づく、原油及び天然ガスの鉱脈の探査・採掘に使用される資財の国内での建造及び改造に伴う関税優遇制度。⑥ Depósito Especial - DE- 特別保管倉庫=国産化される又はされない、外国製の車両、機械、装置、器具及び道具に使用される部品、組品及び補修・保守用資材を、免税で保管することができる優遇措置。

これらの制度では、ブラジル国内市場向けあるいはブラジルからの海外市場向けに、工業製品税、社会保険融資負担金及び社会統合基金/公務員資産形成プログラムの課税停止といった税務メリットが適用される。

ブラジルのメセナについての一考察



花田勝暁
『ラティーナ』誌編集長

「(文化を) 支援するための様々な方法、可能性、手法があり、この支援を分析する方法も様々だ。我々の公的支援のモデルは、10年以上の経験があり、今世界で最も有効で民主的な方法のもの1つだ。ブラジルのルアネー法や視聴覚法と似た内容の法の整備が様々な国で進んでいるのは偶然ではないのだ。」(ジルベルト・ジル文化大臣[2006年当時] | 第2回文化と企業市民活動の全国フォーラムにて)

ルアネー法と視聴覚法は、文化支援を推奨する連邦レベルでの租税優遇政策である。視聴覚法は長編映画を支援する法律で、ルアネー法は舞台芸術、出版、映像制作、音楽、美術、文化遺産など、長編映画以外の様々な文化活動に適用される。私は、仕事と並行して、ルアネー法の研究を行っている。

ブラジルでは、国家・市場・市民社会からなる多元的な制度を目指す「社会自由主義国家」への道が90年以降模索されてきたが(小池洋一『社会自由主義国家: ブラジルの「第三の道」』、2014)、ルアネー法の仕組みも国家・市場・市民社会がそれぞれに重要な役割を果たして完成するという制度設計がされている。

具体的には、実際に文化プロジェクトに資金を提供するのは主に企業であるが(個人も可能)、その文化プロジェクトは政府が毎年選出する文化関係者によって組織された審査委員会に認められた文化プロジェクトでなくてはならない。文化プロジェクトを企画し、政府に申請し、実際に製作するのは市民である。

現在でも汚職のニュースに事欠かないブラジルであるが、ルアネー法に先行した文化への租税優遇政策(サルネイ法[1986~90年])において多くの膿みが出されたことによって、ルアネー法は考えられる汚職の可能性はできるだけ排除できるような制度設計がされていた。しかし、運用を経るにつれて問題点が明らかになってきた。それは、恣意的に資金を提供するプロジェクトを選ぶことができる企業の立場が、3者の中で一番の決定権を持ってしまふことだ。具体的な問題点としては、①支援されるプロジェク

トが大都市に偏る、②租税が「優遇」される割合が高いと審査委員会によって判断されたプロジェクトばかり支援される、③知られていない芸術家より有名な芸術家への支援が行われるといったことだ。

こういったことが問題視される中、企業自身がこの問題に対応するべく、「公的な視点」を取り入れた形で、支援するプロジェクトを決定する動きが出て来た。それは、ペトロプラスが99年にスタートした公募の仕組みである。

連邦政府による審査と並行して、ペトロプラスが明確な目的と指針を発表した上で一般からの文化プロジェクトの公募を行った。審査するのも社内の人間ではなく第3者による審査委員会である。審査基準の中で、文化的多様性に寄与すること、「持続性」を持っていること、アクセスしやすいこと等が重要視されている。

ペトロプラスから始まったこの取り組みを、それぞれの視点を加えた上で取り入れる企業が現れ、現在では20以上の全国区の企業が公募の制度を取り入れ文化支援を行っている。企業自身の自浄的な動きで、文化への租税優遇政策における国家・市場・市民社会がそれぞれの役割を果たすという制度モデルは興味深い新たな段階に入った。

国営企業ではあるので一般の企業と単純な比較はできないと前置きしつつも、ペトロプラスは、文化支援において一歩前を行く企業であり、額の面でも長年最も文化を支援する企業であった。しかし、ペトロプラス本体の巨大な汚職が明らかになるなど、企業としての体力が落ちてしまったことによって、文化支援においてこれまで果たしてきた役割を今後も果たせるのか不明瞭な状況になってしまった。「汚職」によって、どうやったら公明正大に文化支援できるのかということを制度設計の点から長年一歩踏み込んで模索してきたペトロプラスの文化支援に終止符が打たれるならば、非常に残念である。

ブラジル全体の景気後退の中、他の企業についても文化に対する支援を止めかねず、長年築いてきた文化支援の経験の蓄積、国家・市場・市民社会がそれぞれに重要な役割を果たして完成するという民主的な文化支援の仕組みが、脆くも崩れ落ちる危険のある難しい局面を迎えている。



もてるものの悩み…

ブラジルの会計事務所や弁護士事務所では、トレーニーとして学生を雇い入れる。ブラジルではまだ、夜間大学に通う割合が高く、昼間の大学に通えるのは一部のお金持ちの子息のみである。私が2年間出向していたPwC(プライスウォーターハウスクーパース)ブラジル法人のトレーニーも、朝8時15分から17時45分まで働き、その後19時から23時まで大学に通っていた。平日は連日これが続くのであるから、ブラジルの大学生は、本当に勤勉でタフだ。女性の就労率も高く、アメリカに近づいている。日本と違って、まだbabá(子守役)やfacineira(お手伝いさん)がいてくれるため、産後は復帰して、仕事を続けるケースが圧倒的に多い。

語学研修のため、マセイオのブラジル人家庭にホームステイした際も、その娘さんはオートディーラーで働いていた。所得水準は、いわゆるブラジルでいうCクラスで、日本に比べるとかなり低い方であったが、babáやfacineiraが子供や家事の面倒をみてくれるので、娘さんは週2回(!)美容室に通い、美を磨く。足には息子の名前のTatooを飾る(ちな

ウーマン・アイ

片岡万枝

(公認会計士。プライスウォーターハウスクーパース(株)ディールアドバイザリー部門シニアマネージャー。2011-13年ブラジル駐在)

みに、旦那さんの名前を入れると、すぐ別れてしまうジンクスがあるようだ。結婚してからも恋愛モードが続くブラジルでは、女性はいつまでも美しく、一方男性は情熱的で、心配りができないといけな。

整形市場も、アメリカに次ぐマーケットである。ブラジル人の美的感覚では、日本と違って、胸の大きさよりもヒップの大きさの方が大事。私のポルトガル語の先生が、「実は、私も胸を小さくしたの。ヒップに入れるのはやめたけど…」とカミングアウトした時には、思わず、「何でもったいない!」と小さな胸の日本人は叫んでしまった。多くの日本人には実感し難いことだけれども、胸が大きすぎると、姿勢が悪くなり、いろいろと支障がでるそうだ。もてるものの悩みである。

中間所得層の拡大とともに、こうした女性の購買力はさらに高まりをみせ、日本企業にもきつと様々なビジネスチャンスを生むことであろう。ただし、家事の便利グッズは皆自分では使わないので、売れないかもしれない点、ご注意を!

ジャーナリストの旅路

釧路の心とブラジル

野間清尚

(日本経済新聞社元サンパウロ駐在、85年同社入社、仙台支局、ニューヨーク米州総局、広島支局など歴任、現在釧路支局長)

私は昨年、生まれ故郷でもある北海道東部の釧路市に赴任した。釧路に来て以来、ブラジル駐在時代(1996年から4年間)に抱いた思いとどこか相通ずるものを感じている。

まずは広さ。釧路支局がカバーする地域は釧路、根室、十勝、東オホーツク、そして日本固有の領土、北方4島を加えると、四国4県に鹿児島県を加えた広さに匹敵する。日経新聞の国内支局では最も広い。サンパウロ支局も中南米33カ国、1人がカバーする範囲としては日経の中で最も広い。移動の苦勞も同じだ。

そして多様性。管内には世界自然遺産の知床のほか、阿寒、釧路湿原の2つの国立公園、特別天然記念物のマリモとタンチョウがあり、釧路沖ではシャチも見られる。自然の雄大さ、海から川、湿原、山にいたる多様性は、アマゾンからパンタナウ、レンソイス、南部の草原とブラジルの

圧倒的な自然の存在感にひけをとらない。そうした環境で育まれた食材を使った料理の美味しいこと。北海道の中でも「食の王国」と言われる釧路の食の多様性、鮮度の良さはブラジルなど中南米で味わった食の楽しさと似ている。

ブラジル、釧路の双方で感じる居心地の良さで忘れてはならないのが「人間」であろう。多くのブラジル人が持つ陽気さとホスピタリティー、すぐにAmizadeが生まれる心の壁の低さは説明するまでもない。「イランカラプテ」という言葉をご存じだろうか?阿寒湖など北海道に多くが住むアイヌ民族の言葉で「こんにちは」を意味する。直訳すると「あなたの心にそっと触れさせてください」。何と暖かい言葉なのだろう。北海道は歴史をたどると、大ざっぱに言って縄文文化までで、稲作が行われた弥生文化の時代はない。寒くて稲作ができなかったからとされる。

今ではさすがに狩猟生活をしている人はみかけないが、太古に人間が持っていた素朴さ、家族愛、自然への畏敬の念と言ったものは脈々とアイヌ民族を中心に受け継がれているように思われる。そんな人々からにじみ出る暖かさが心地よさを感じさせるのであろう。釧路市は出稼ぎで来るブラジル人などはいないため、街中でブラジル色を感じることはない。しかし、釧路の人間の暖かさに触れるに付け、ブラジルを思い出さずにはられない。

グローボTV開局50周年と ブラジル現代史

岸和田仁（「ブラジル特報」編集人）

グローボとは地球ないし地球儀という意味だ。1950年代ごろまでは、ブラジル人にとってグローボとは、作家エリコ・ヴェリッシモの著作集などで有名な書店・出版社のことであったが、1960年代以降は、グローボ＝地球とは、新聞やTVを擁するブラジル最大の大メディアグループと同義になっている。

そのグローボTVが開局したのは、1965年4月26日のこと。従って、今年は開局50周年となり、4月から5月にかけて、50周年記念の特別番組がいくつもオンエアされたのであった。筆者もそのいくつかを見たので、雑感メモを記してみたい。

まず、4月26日朝（現地時間）の農業番組Globo Ruralは、過去50年間でブラジル農業がいかに躍進したかをグラフと画像で確認する1時間となった。穀物生産量は、2.9千万トンが2億トンへと7倍に増えたが、植付面積は1.5億haから2.3億haへと50%増えたのみ、すなわち、生産性が4倍以上向上した。あるいは、プロイラーは、50年前は生体重量2kgに達するには70日必要であったが、現在は、45日間で2.8kgになっている、といった農業分野におけるポジティブな多元情報が提供されていた。

同じ26日の夜のバラエティー番組ファンタスティコでは、カエターノ・ヴェローゾとジルベルト・ジルによる記念コンサートに象徴されるような“自画自賛プログラム”が放映されたが、筆者にとって、一番興味深かったのは、看板ニュース番組JN（ジョルナル・ナショナル）の延長番組として、4月20日から24日まで5回に分けて放送されたラウンドテーブルであった。1965年から10年毎に区切って、2015年までブラジル現代史を画像で辿り、その報道当事者であったベテラン記者（ガルボン・ブエノやペドロ・ビアル、グロリア・マリアといった面々）が20名も集まって思い出話なり、苦渋のコメントをしたり、と活発な言葉の応酬があり、それをコーディネート役のウィリアム・ポーネルがうまく仕切っていく、なんとも見ごたえのある番組であった。

例えば、1984年1月、大統領直接選挙を要求する数十万人の市民デモがサンパウロの中心街を埋め尽くした時、JNでは、サンパウロ市創立430周年記念の集まり、

とウソの報道をした、という事実を当時の映像を見ながら、自己批判的に語っていくのは圧巻であった。

JNの放映が始まったのは1969年9月のことであったが、1970年代には早くも代表的なニュース番組に“昇格”しており、2000年前後のJNの平均視聴率は40%以上というとんでもないメガ番組であった。だからこそ、テレビ文化を批判する映画作品を発表してきたカカー・ディエグス監督も「JNを通じて得られる日々の情報は、ブラジル国民にとって、ノヴェーラやサッカーあるいはカーニバルと同じくらいブラジル文化の一部となっており、（JNをみることは）まさに、欠かすことのできない習慣となっている」と語っていたし、カルドーゾ元大統領は、社会学者としての意見として「JNは文化統合のファクターである」とまで述べていた。

そんな“国民的ニュース番組”も、視聴率は年々漸減傾向にあることも冷徹なる事実である。いくつかの報道から判断すると、平均視聴率は、2000年39%、2011年32%、2012年28.2%、2013年26.3%となっており、2014年8月22日には15.6%にまで落ち込んでいる。2015年4月の平均は21%の由だ。

日本のNHKなり民放のニュース番組の視聴率に比べれば、はるかに優良数値ではあるが、ここ10年でJN視聴率が半減した事実をどう解釈するべきか、いろいろな意見があろう。他局に流れた部分もあれば、テレビ依存率が下がり、スマホやiPadでニュースを読む層が増えた、という説明も一理ある。

かつて軍事政権最後のフィゲイレード大統領時代、文官長として絶大な権力を有したゴベリー将軍は、軍人のなかでは極め付きの理論派で知られたが、常々「ロベルト・マリーニョ率いるグローボTVには注意しろよ」と語っていたことは、よく知られたエピソードである。軍政に寄り添ったグローボは、「第四の権力」といわれたほどの巨大な影響力を有するメディア帝国となったが、そのパワーに陰りが出てきている、と理解すべきだろうか。解釈はともかく、グローボTVの来し方行く末はブラジル現代史そのものと言わざるを得ない。



好調に推移する穀物生産

IBGE（地理統計院）によれば、今年のブラジル農業は、二つの“史上初めて”を経験することになりそうだ。一つ目は、穀物生産量が史上初めて2億トンを超えることになる可能性が高い。5月13日付けエスタド紙の報道によれば、2015年度の穀物生産見込みは2億百万トンで、前年比4.2%増。穀物のなかでも大豆と小麦が伸長しており、大豆は9,560万トンと前年比10%増、小麦は780万トンで前年比26%増、となっている。もう一つの、史上初めては、北東部の穀物生産が南東部のそれを初めて上回る見通し、である。北東部が1890万トンで、南東部は1830万トン、というのが最新見込みだ。大豆やトウモロコシの収穫が伸びているパイア州西部、ピアウイ州南部、マラニャン州南部という新農業フロンティアの貢献がはっきり数字に出てきた。

第一四半期のGDP伸び率

IBGE（地理統計院）の発表によれば、第一四半期のGDP伸び率は、前年同期比でマイナス1.6%であった。プラス成長したのは、鉱業部門のプラス12.8%、と農畜産部門の4.7%の二部門のみであり、製造業部門はマイナス7.0%であった。2003年から45期連続してプラス成長してきた家計消費もマイナス0.9%となり、国内経済の停滞が顕在化してきた。

ルセーフ第二期政権による増税政策、先行き雇用不安、インフレ高進による実質賃金の低下と一般家計消費意欲の減退、などから、金融市場アナリストたちの、現時点での年間GDP伸び率見通しは、マイナス1.0%～2.0%となっている。

5月の新車販売状況

FENABRAVE（全国自動車販売業者連盟）によれば、今年1月から5月までの、トラック・バスを含む新車累計販売台数は110万台と前年同期比で20.9%のマイナスとなった。国内経済の停滞、IPI（工業製品税）減税中止、継続する金利上昇、与信チェック強化によるクレジット縮小などから新車販売は苦しい展開が続いている。こうした現状に合わせ、各自動車メーカーは、レイオフ、集団休暇などを実施して在庫調整、コスト削減に注力している。（例えば、フォードのサンベルナルド・ド・カンポ

ス工場では2,400人が集団休暇、GMのサンカエターノ・ド・スール工場では5,500人が集団休暇、VOLVOのクリチーバ工場では、4,200人の従業員のうち500-600人をレイオフ、さらに600名を希望退職制度で削減。）この苦境は、メーカーばかりか販売ディーラーも同様であり、全国で250店舗が閉鎖され、1万2千人が解雇されている。

中国李克強首相ブラジル訪問についての5月20日付フォーリャ・デ・サンパウロ紙報道

19日、伯中両国は、企画、インフラ整備、貿易、エネルギー及び鉱業の分野に関する35の二国間協定に署名した。合意したパッケージは530億米ドルに上るが、複数のプロジェクトが未だ検討段階にあり、これが実際に中国の対伯投資金額になるとは限らない。訪問の具体的な成果は、Embraer社製航空機22機の天津航空への売却（11億ドル）、中国交通銀行による伯BBM銀行の買収（5.25億リアル）、伯産牛肉の対中輸出再開（年間輸出の潜在性は1.5億ドル相当。当初8社が輸出を行い、7月までに26社に拡大される）である。南米横断鉄道については、中国側が同鉄道実現可能性に関する調査を行うことになっており、調査報告書が明年5月に伯に提出される予定であるが、関係者間では同鉄道の建設可能性は高くないとされている。伯大統領府は、中国とのビジネスを通じて、財政緊縮政策により影響を受けている国内投資を再活性化させることを期待しており、530億ドルの投資の内、70億ドルはペトロプラス社のプロジェクトに融資される予定。また、ルセーフ大統領は李首相との会談後、2016年の訪中を表明した。

訪日ブラジル人に対する短期滞在数次ビザ発給

昨年8月の安倍総理大臣によるブラジル訪問の際、二国間の交流促進に資する取組として、数次ビザ導入が発表されたが、これを受け、外務省は、6月15日から発給を開始することを正式に明らかにした。

この短期滞在数次ビザは、ブラジル国民（一般旅券所持者）に対するもので、滞在期間は15日または30日。この数次ビザ発給により、日本へのブラジル国民観光客の増加、ビジネス面での利便性の向上など、日本ブラジル間の交流が一層発展することが期待される。



日本ブラジル中央協会 からのお知らせ

新刊書 & 新盤紹介



◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『笠戸丸移民 未来へ継ぐ裔孫』 (赤嶺園子著)

第一回ブラジル移民船・笠戸丸に乗っていた農業契約移民 781 人のうち、325 人が沖繩出身であった。実に 41% を占め、県別では断トツの一位だ。この 325 名の足跡とその子孫たち（二世から六世まで）を追跡調査したレポートが本書である。日本人として初めて運転免許を取得して大統領専任運転手となった比嘉秀吉、日本人として初めて歯科大学を卒業して歯科外科医となった金城山戸、といった先人の貴重な記録は熟読に値する。

(沖繩タイムス社 2015年1月 306頁 2,000円+税)

『21世紀ラテンアメリカの挑戦』 (村上勇介編)

ラテンアメリカでは 1990 年代末以降、ネオリベラリズム路線への批判が強まって「ポストネオリベラリズム」と呼べる時代に入った、と認識する関西在住研究者が、現代政治史を分析した論文集である。ブラジルで

は、政党政治が安定化し非エリート層が台頭している、として、民政移管（1985年）からコロル政権、カルドゾ（PSDB）政権、そしてルーラ（PT）政権と、政治は前進している、という視点から現代史をマクロ的に把握している。

(京都大学学術出版会 2015年3月 185頁 2,800円+税)

『食と文化』(細田典明編著)

北海道大学の公開講座を一冊にまとめたものだが、第7章の仁平尊明「ブラジルにおけるサトウキビ栽培の発展」は、ブラジルにおけるサトウキビ栽培の特徴と問題点を詳しく指摘する好論文である。現地調査を踏まえ、主産地が歴史的産地のノルデスチからサンパウロに移行した背景を明らかにし、大規模・小規模農家、収穫請負業者、農業機械業者、砂糖並びにエタノール加工工場、といったそれぞれの事例研究が要約的に述べられている。

(北海道大学出版会 2015年3月 253頁 2,400円+税)

『アマゾン 森の貌』(高野潤著)

世界最大の河アマゾンの流域面積の60%以上はブラジルであるが、秘境ともいえる原生環境が残されているのは、上流域となるペルーやエクアドルの部分である。1980年代から同地域に何十回に入り込んでフィールド調査を行ってきた写真家が、現地の仲間から聞いた話や自身の目と耳と皮膚でつ

かんだアマゾンの印象を写真と文章で再構成した著書だ。TVなどで紹介される紋切型のアマゾン表層的理解の対極にある深層を読者は感得することになる。

(新潮新書 2015年5月 175頁 1,400円+税)

◆◆◆◆◆ 新盤紹介 ◆◆◆◆◆

『ENCONTRO』(JAZZ BATA)

キューバの両面太鼓バタを駆使するパーカッショニスト後藤嘉文がサンバを演奏する、という楽しい試み。今回選ばれた名曲は、ジャヴァン、ジョアン・ドナト、シコ・ブアルケといった面々のものだが、ブラジル人パーカッショニストのヘナト・マルチンと後藤の共演がタイトルにもなっているエンコントロ（キューバとブラジルの合流）だ。

(アオラコーポレーション 2015年5月 1,852円+税)

『NÁ e ZÉ』

(NÁ OZETTI & ZÉ MIGUEL WISNIK)

日本語を含む6か国語を話し、芭蕉評伝も著した前衛詩人パウロ・レミンスキーやポルトガルの国民詩人フェルナンド・ベッソア、あるいはモデルニズモを牽引したオズワルド・デ・アンドラーデといった詩人たちの詩を歌詞にして作曲家ヴィズニキがメロディーを付けた14曲を、美声歌手ナー・オゼッチが歌う、というなんと贅沢なコラボレーションのアルバム。

(大洋レコード 2015年5月 2,500円+税)

!! 「びっくり豆知識」!!

「ブラジルの国境線は 10 カ国。でも紛争わずか」

1年ほど前までは海中の岩礁に過ぎなかった場所を埋め立てて「人工島」にし、いつの間にか滑走路ができるぐらいの広大な陸地に――。中国は南シナ海に「海の国境線」を勝手に引き、何がおかしい、と言い張っている。スプラトリー（南沙諸島）の話である。ベトナム、フィリピンなど領有権を主張する周辺国だけでなくアメリカ政府からも危険な海洋進出との懸念が表明されている。

中国はなぜこれほどまでに領土拡張にこだわるのか。陸地での拡張は現状では無理だし、海洋進出は長年の「悲願」だからだ。しかし太平洋への出口には日本列島がデンと構えており、彼らにとっては邪魔な存在だ。尖閣諸島の領有にこだわるのもそういう理由による。

どの国の為政者も領有権争いとなると目の色を変えるが、ふとブラジルに思いが及んだ。国境を接する国が多いのに、しばらく国境紛争など聞いたことがないからだ。実はブラジルは世界で3番目に多い10カ国と接している。アルゼンチン、ウルグアイ、コロンビア、ベネズエラ、パラグアイ、ボリビア、ペルー、ガイアナ、スリナム、仏領ギアナの各国だ。

世界で最も国境隣接国（陸地のみ、海上・海外領土除く）が多いのはロシアで、14カ国にのぼる。2位の中国も14カ国との説があるが、正確な数は不明。欧州のドイツ（9カ国）、フランス（8カ国）なども多くの隣接国を抱える。ブラジルでは17世紀のオランダ人による北部・北東部への侵入、18世紀に入ると各所で内乱が頻発した。しかし1750年のポルトガルとスペインによるマドリッド条約を基本に、18世紀後半までにブラジルの国境線はほぼ確定した。

独立後の19世紀半ばにはパラグアイの侵入に対抗する戦争もあったが、大きな国境紛争に発展したことはない。アマゾンの奥地では他国が戦争を仕掛けにくかったこともある。小さな反乱があっても自然消滅したこともあるだろう。南米のスペイン語圏では凄惨な国境紛争や独立戦争を経験した国もあるが、なぜかブラジルにはそれが無い。余程折り合いをつけるのがうまかったのか。

中国の李克強首相がこの5月、2012年の温家宝前首相に続いてブラジルを訪問した。ブラジルへの多額の経済協力を発表した。そんなことよりブラジル側から李首相に「領有権争いを避ける秘策」を伝授して欲しかった。(W)

▶ 事務所移転のお知らせ。

6月6日より、下記住所に移転しました。

【新住所】東京都港区新橋1丁目18-2 明宏ビル本館 5階

新事務所 アクセスマップ



▶ 会員交流懇親会

日時：2015年9月10日(木)18:30～(予定)

場所：CAFE do CENTRO 日比谷帝劇ビル店

住所：東京都千代田区丸の内3-1-1 帝劇ビル B2F

都営三田線日比谷駅改札よりB3出口帝国劇場直結
JR有楽町駅 徒歩3分

※詳細は追ってホームページでご案内します。

▶ 2015年6月18日に定時会員総会が開催されました。

2014年度決算、新たな役員体制などが承認されました。

新役員の詳細、その他決議内容は、協会ホームページに掲載しました。2014年度決算については、事務所に閲覧可能です。

「ブラジル特報」「協会ホームページ」に 広告を掲載しませんか？

当協会の隔月発行の機関誌「ブラジル特報」、及びホームページへのバナー広告掲載企業を募集しております。

ブラジル特報は、2014年9月より全面刷新し、発行部数も1500部と大幅に増え、ページ数も、18ページから24ページに増やしました。ホームページもリニューアルし、明るく、読みやすく、便利なサイトを目指しており、バナー広告も大きく掲載しております。広告掲載にご興味がある企業は、協会事務局までご連絡下さい。

2015年度 秋期

ポルトガル語講座

9月中旬より
秋期講座 開講します。

詳細決定次第、受講生を募集します。

初心者～上級者まで、レベルに合わせ、5クラスをご用意しております。これからポルトガル語を学びたいとお考えの方、覚えたポルトガル語を生かし、スキルアップをしたいとお考えの方、是非、ご参加ください。秋期講座の詳細が決まり次第、協会ホームページにてご案内します。



法人・個人

新規会員募集中!!

法人会員約100社、個人会員約250名。
皆様のご入会、心より、お待ちしております。

当協会の活動目的である「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特権

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます。(会員限定イベントへも参加いただけます。)
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます。
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます。

年会費

入会金は不要です。

| | | |
|------|--------------|---------------|
| 法人会員 | 1口 (2口以上) | 20,000円 以上 |
| 個人会員 | 1口 | 10,000円 |

入会に関して、ご質問・ご不明点などございましたら、協会事務局まで、お気軽にご相談ください。

お申込みは
こちらから

《日本ブラジル中央協会 公式HP》 <http://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会

検索

スマートフォン・携帯電話の方は、QRコードもご利用ください。





スペイン・中南米との架け橋として20年
スペイン語・ポルトガル語の イスパニカ

www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

| | | |
|---|--|---|
| <p>通訳 翻訳</p> <p>ビジネスから文芸まで経験豊富なプロがクオリティの高いサービスを提供</p> <p>取扱い言語: スペイン語・ポルトガル語 英語・フランス語・ドイツ語 イタリア語・ポーランド語</p> | <p>語学スクール</p> <p>初心者はもちろん、中・上級者向けコースも充実の溜池山王教室</p> <p>www.hispanica-academia.org</p> <ul style="list-style-type: none"> 通学 通信添削 オンライン ※ポルトガル語は通学のみ | <p>書籍の執筆・編集</p> <p>赴任、出張にはこれ!</p> <p>安心のカナ発音 英語付き。</p> <p>ブラジル・ポルトガル語 ビジネス会話フレーズ辞典 ブラジルでのビジネスシーンで役に立つ例文を豊富に掲載 約2200掲載 ビジネス文書例も充実!</p> <p>ミニマム文法やミニ辞典も掲載。 三修社刊</p> |
| <p>中南米の情報提供</p> <p>スペイン通信社EFEの情報をもとに中南米の最新ニュースを日本語で</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中南米経済速報 (週刊) ・政治・治安情報 “CRONICA” (月～金の毎日) | <p>企業語学研修</p> <p>ニーズに合わせた効果的な研修</p> <p>粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に導く語学力習得をとことんサポート。実践的なコミュニケーション力を最大限ひきだすレッスンをアレンジします。</p> | <p>スペイン語 ビジネス会話フレーズ辞典 スペイン語圏でのビジネスシーンで役に立つ例文を豊富に掲載 約2400掲載 ビジネス文書例も充実!</p> |

(有)イスパニカ 〒107-0052 東京都港区赤坂 2-2-19 アドレスビル1F (銀座線・南北線「溜池山王」駅8番出口前)
 Tel.03-5544-8335 Fax.03-5544-8336 hola@hispanica.org

在東京ブラジル総領事、マルコ・ファラーニ氏の提案で、

【大泉町のブラジリアンプラザに日系人移民の歴史・逆移民の歴史記念館】

プロジェクトが始まりました。大泉町、大泉観光協会のみなさまも賛同しています。
 運営団体の「一般社団法人日本海外協会」は、官製の戦後移民送出し機関で、初代会長は千葉三郎氏、2代目会長は岸信介氏、3代目会長は安倍晋太郎氏、現在はJICA OBの今村忠雄氏が会長を務めています。

基金の調達、博物館運営の資料収集、日系人の老人ホーム運営、子どもの健全育成事業、ポルトガル語・スペイン語図書館の運営等、みなさまの心温まるアドバイス、ご支援を期待しております。

一般社団法人日本海外協会
 専務理事 林 隆春
 東京都港区新橋3丁目8番6号大新ビル3F
 TEL : 090-7021-7037



“生きた”ポルトガル語が身に付く。



ブラジルでビジネスや生活をする上で欠かせないのがポルトガル語です。
 BrAsia(ブレイジア)では、赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
 講師任せにはしない!現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia(ブレイジア)の研修プログラム

■ 赴任前ブラジル・ポルトガル語短期語学研修(30~50時間)

現地着任前に最低限の準備を! →国内ですべきは独学の準備と自己紹介、タクシー移動もスムーズに!
 ※企業への講師派遣(首都圏・名古屋地区・京阪神)も可能です。

■ ブラジル異文化概論&マネジメント講座(半日~1日)

ブラジルの文化、ビジネスの課題を解決! →労働争議は日常茶飯事?各分野の専門講師が課題を解決します!

ブラジルで学ぶ! 短期語学研修プランもご用意!

■ サンパウロ市内提携先での現地語学特訓コース(3~6か月)

キャンパスライフは不要! できればマンツーマンで語学力を一気に高めましょう!

株式会社漢和塾 BrAsia(ブレイジア)事業部 〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-7 銀座大栄ビル5階 TEL 03-4360-8627
 お問い合わせはコチラ! E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com>



BrAsia代表
 小川善久

大阪外国語大学
 ポルトガル・ブラジル語学科
 1987年卒業
 この数年、年に2~3回のペースでブラジルに出張。サンパウロはじめ複数の主要都市を訪問。「事件は現場で起きている!」との考えで、研修会社の責任者としてブラジルを奔走中!



鉄^{てつ}は金属の王なる哉

鉄は文明を開き、社会を支え、そして未来を築くためになくてはならない素材です。新日鉄住金は世界最高の技術とものづくりの力で鉄の可能性を極限まで追求し、“総合力世界No.1の鉄鋼メーカー”をめざしています。だからこそ私たちは、「鉄」の文字の意味合いを「金属の王なる哉」と受けとめ、総合力世界No.1への意志と誇りをこめて社名ロゴに使用しています。